

# 導 入

—— なぜ人は戦うのか ——

# 講義概要

(シラバスより)

このクラスは、現代世界における紛争、戦争、テロなどの問題を比較宗教学的な視点から考察し、異なる信仰や価値観を持つ者同士が、地域社会や国際社会において、いかに共存していくかを考えるために必要な知識や認識を得ることを目的としています。

20世紀には二つの世界大戦をはじめ様々な戦争や紛争が起こり、また、21世紀はじめには9・11同時多発テロ事件が起こりました。それらの背景や影響を、特に宗教思想との関係に注目して考えていきます。ポスト冷戦時代の地域紛争に関しては、ユダヤ教・キリスト教・イスラームの相互関係が不可避的に問われてきました。そうした一神教に特徴的に見られるロジックを分析すると同時に、一見、宗教対立と見えるものが、いかに政治的に偽装されたものか、注意を払っていきたいと考えています。

戦争に対する考え方を歴史的に俯瞰するために、キリスト教史において現れた、戦争をめぐる三つの類型、すなわち、絶対平和主義 (pacifism)、正戦 (just war) 論、聖戦 (holy war) 論を取り上げます。ただし、それがキリスト教世界のロジックとして自己完結しないように、他の宗教、特にイスラームの戦争理解や正義理解を参照軸として用います。

日本の論壇では、一神教を独善性の象徴と見なし、多神教的思考にこそ世界平和の鍵があるという安直な主張がいまだに繰り返されています。こうした平板な文明論を批判的に克服していくために、多元的な文明理解のあり方を考えていきます。また、近代日本が戦争への道を歩み始めたとき、そこには宗教および宗教政策が深く関与していました。グローバルな文脈の中で、日本の近現代史における問題点も掘り下げていきます。

## 【重要】授業用ページ

- 小原克博 On-Line <http://www.kohara.ac/>
- 授業用資料は、このサイトの「Education」→「講義概要・シラバス」→「宗教と平和」にアップします。紙による資料の配布はありません。
- 事前に授業用資料をダウンロードして、授業に出席してください。

## 成績評価基準

- 成績：出席（30%）＋期末試験（70%）
- 10分以上の遅刻は出席としませんのでご注意ください。交通遅延等、不可避の事情があった場合には証明書を出していただければ考慮いたします。
- 就職活動等も一定の配慮をしますが、原則的に、事前に証明書を提出するようにしてください。

## なぜ人は戦うのか

## 戦争と人間

- ホブズズ的人間観
- 無秩序（戦争）から秩序へ（『リヴァイアサン』1651年）
- ルソー的人間観
- 秩序から無秩序（戦争）へ（『人間不平等起源論』1755年）

## 戦争の原因

- 考古学・文化人類学の視点から
- 経済的要因
- 思想的要因

## 人間の道徳性と社会・国家の非道徳性

ラインホルド・ニーバー『道徳的人間と非道徳的社会』（原著1932年）より

愛国心はそのなかに倫理的パラドクスをもっており、最も鋭い凝った批判でなければいかなる批判も受けつけないものである。そのパラドクスとは、愛国心は、個人の非自己中心主義が国家の利己主義に転化する、ということである。

国家への忠誠心とは、もしより低い忠誠心や地方的利害などくらべるならば、それは高度な利他主義の形態である。それゆえ、それはすべての利他的衝動の担い手となるのであり、そして、あるときには、その忠誠心は、個人が国家とその事業にたいしてもつ批判的態度をほとんどまったく破壊してしまうほどの熱烈さをもって、表現されるのである。この献身の無条件的性格が、まさに国家的権力の根拠そのもの、またその力をなんの道徳的抑制なしに行使する自由の根拠そのものなのである。このようにして、個人の非自己中心主義は、国家の自己中心主義を助長するのである。

## 【参考文献】

- エリ・ウィーゼル「戦争はどうして起こるの?」、ベッティナ・シュティエゲル『ノーベル賞受賞者にきく 子どものなぜ?なに』主婦の友社、2003年（配布資料→次回持参）。
- 松木武彦『人はなぜ戦うのか——考古学からみた戦争』講談社、2001年。
- 栗本英世『未開の戦争、現代の戦争』岩波書店、1999年。